



姫手毬のある情景 鈴木 正教

1980・10 130cm×130cm 油彩

身の回りの古びた器物、民芸品などをモチーフにして、心象的な情景を表現したものである。

無限に広がる背景と、モチーフの間に交される詩的な対話に叙情性を、垂直と水平の構成に静寂感を意図し、対象によって展開されるイメージは、普遍的なインナー・リアリティ（内的現実性）である。

静かな時の流れに、微妙な反応を感じたときに願い求める心情は、永遠に静止した内的な影の存在ではなかろうか。インナー・リアリティはその影にほかならない。

ある人は、この作品をロマンチック・リアリズムと言う。

遠い遙かなものが、透明な記憶で甦ってきたとき、インナー・リアリティの根底に向って帰納していく方法や筋道を裏打ちしようと試みたのが、「姫手毬のある情景」である。